

閉鎖された地下鉄廃駅
で都市伝説マニアの先輩に暗闇に連れ込まれたカントボーイが恐怖と興奮の区別がつかなくなり廃ベンチで三回中出しされて完全に壊された話

「手、離すなよ」

低い声が鼓膜を震わせた瞬間、涼の指先がびくりと跳ねた。

暗い。暗すぎる。懐中電灯の細い光が切り取るのは、タイル張りの壁面と、錆びた駅名標の残骸だけ。その向こうは底のない闇。

「と、戸川さん……やっぱ帰り——」

「帰れないよ。終電もう終わった」

パーカーの裾を掴む手が震えていた。飲み会のアルコールはとくに醒めている。心臓がうるさい。自分の鼓動が廃駅の天井に反響して返ってくる。

戸川が涼を引っ張ってホームの奥へ進む。朽ちた木製ベンチの前で足を止め、涼の肩を掴んで座らせた。

「ここで少し休もう」

ギシ、と木が軋む。涼は両手で戸川の腕にしがみついたまま離せなかった。

——パチン。

懐中電灯が消えた。

「っ——」

完全な闇。瞼を開いても閉じても変わらない、圧倒的な暗黒。喉から引き攣った呼吸が漏れる。

「と、戸川さんっ……！ ライト、つけ——」

「しー。30秒。30秒だけ暗闇に身体を慣らせ」

声だけが近い。どのくらい近いのかわからない。涼はパーカーの裾ではなく、戸川の腕そのものにしがみついた。筋張った前腕の輪郭を、爪が立つほど強く掴む。

「すげえな、お前の心臓。俺の腕にまで伝わってくる」

「こ、怖いんですっ……当たり前でしょ……っ」

「知ってるか。怖い時と興奮してる時って、身体の反応ほとんど同じなんだよ。心拍が上がる、汗かく、末端が痺れる——」

戸川の空いた手が、涼の胸に触れた。心臓の真上。ドクドクドクと脈打つのが掌越しに伝わる。

「っ……何してっ……」

「確認してるだけ。——お前、今どっちだ？ 怖いのか、興奮してるのか」

その手が、胸から滑り落ちた。

腹を撫でる。ベルトの金具に指が掛かる。

「ちょ——戸川さんっ？」

「ずっと気になってたんだよ」

カチャリ、とベルトが外れる音が闇に響く。

「更衣室で着替える時、お前だけ個室使うだろ。股間、異常に隠すだろ。——何隠してるんだよ、桐島」

全身から血の気が引いた。

(バレた——？)

「ち、違っ……俺はっ——」

「違わないだろ」

ジッパーが降りる。冷たい地下の空気がジーンズの間から侵入してくる。手で押し返そうとするが、暗闇で距離が掴めない。掴んだはずの戸川の手首はすりと逃げ、次の瞬間にはジーンズごと下着を引き下ろされていた。

「やっ——やめっ、見ないで——」

「見えないよ。真っ暗だ。——でも、触ればわかる」

大きな掌が、涼の股間を包んだ。

そこに、あるべきものがない。

指先が触れたのは——柔らかく、濡れた割れ目。

「——やっぱりな。カントボーイか」

「っ……」

涼の目から涙がこぼれた。暗闇でよかった。泣いているのが見えない。

23年間、隠し続けてきた。誰にも言わなかった。

「泣くなよ」

意外なほど静かな声だった。

「お前の身体がどうだろうが、俺は別に——」

指が、割れ目の上を這った。

「ん……っ♡」

「——ただ、触りたかったただけだから」

ゆっくりと、下から上へ。恐怖でアドレナリンが噴き出した身体は信じられないほど過敏になっていて、たったそれだけの接触で脳の奥が痺れた。

「はっ……♡ やだ、触らないでっ……♡♡」

「暗闇で触覚が増幅されてるんだよ。普段の何倍も感じるだろ」

（なんで……こんな♡♡ 怖いのに……指一本でっ……♡♡）

指の腹がクリトリスの突起を見つけ、くるり、と円を描いた。

「ひ……っ♡♡ そこっ……だめ……っ♡♡」

（男なのにっ——こんなところ触られて——）

涼の思考がぐちゃぐちゃに掻き乱される。この身体が嫌いだ。男の身体に付いた女の性器。コンプレックスの塊。それなのに、戸川の指に触れられた瞬間、そこが熱を持つ。じわり、と奥から何か滲み出してくる。

「……濡れてきたな。怖くて心臓バクバクなのに、まんこは正直だ」

「っ……まんこなんて……言わないで……っ♡♡」

「事実だろ。俺の指、お前のまんこの汁でぬるぬるだぞ」

くちゅ、と小さな水音が闇に落ちた。

「ひお……っ♡♡ やだ……っ♡♡ 音っ……反響して……っ♡♡」

廃駅のアーチ天井が、その卑猥な水音を忠実に拾い、増幅し、四方から涼に返してくる。

「いやっ♡ はっ♡ はっ♡ 聞かないでっ……こんな音っ♡♡」

「聞いているのは俺だけだ。廃駅だからな。——もっと鳴らせよ」

中指がずるり、とカントの中に滑り込んだ。

「あっ♡♡♡ ゆ、指っ……中にっ……♡♡」

(初めてっ……何か入ったのっ……初めてなのになっ♡♡)

処女のカントが戸川の長い指を咥え込む。愛液で十分に濡れた内壁がぬるりと指を迎え入れ、全身が震えた。暗闇の中、触覚だけが世界のすべて。指の関節の形、爪の輪郭、指紋の渦巻きまで感じ取れそうなほど、神経が研ぎ澄まされている。

「こわい……っ♡♡ でもっ……指がっ……中であったかくて……っ♡♡♡」

恐怖で戸川にしがみつく。しがみつくと身体が密着する。密着すると指が奥に入る。奥に入ると——

ずちゅっ♡ずちゅっ♡ずちゅっ♡

「あっ♡あっ♡あっ♡ せんぱ……っ♡♡ 中っ……かき回さないでっ……♡♡♡」

「お前のまんこ、中までとろとろだな。処女なのに指が全然引っかからない」

(怖いっ♡♡ 怖いのにっ♡♡ おまんこがっ♡♡ 指を締めつけてっ♡♡ 離したくないってっ♡♡♡)

ぐちゅ、ぐちゅ、と水音が廃駅に木霊する。涼の喘ぎも天井に反射して、何重にも重なって降ってくる。まるで何人もの自分が同時に犯されているような——

「やだっ♡♡ 声がっ♡♡ 何人もいるみたいっ♡♡ 全部自分の声なのになっ♡♡♡」

二本目の指が追加された。ぐぷ、と押し広げられ、カントがきゅうっと締めつける。

「おっ♡♡ ひろがっ……♡♡ 二本もっ♡♡♡」

「きついな。でも中はぐちゃぐちゃだぞ。聞こえるだろ、自分のまんこの音」

ずちゅんっ♡ずちゅんっ♡ずちゅんっ♡ずちゅんっ♡

涼のカントが淫らな音を立てて指を呑み込む。戸川の指が内壁の敏感なざらつきを見つけ、そこをずり、ずり、と擦り上げた。

「おあっ♡♡♡ そこっ♡♡ そこ触るとっ♡♡ 頭ん中ぱちぱちするっ♡♡♡」

「Gスポットだ。カントボーイにもちゃんとあるんだな」

(こんな身体、嫌いだったのにっ……♡♡ こんなとこ触られてっ……感じてっ♡♡♡)

認めたくなかった。男の身体に付いた女の器官で快楽を覚えるなんて。でも戸川の指がそこをぐりぐりと抉るたびに、思考が白く塗り潰されていく。

不意に、戸川の顔が涼の太腿の間に沈んだ。

「なっ……何して——」

「暗くて見えないから、味で確かめる」

——ちゅるっ♡♡♡

「びおおっ♡♡♡♡ し、舌っ♡♡♡ べろでっ♡♡♡♡」

長い舌が割れ目を下から上へ舐め上げた。愛液を掬い取り、クリトリスの包皮を舌先で剥き、露出した突起をちゅぷ、と吸い上げる。

「おおっ♡♡ 吸わないでえっ♡♡ そこっ♡♡ クリトリスっ♡♡ 敏感すぎっ♡♡♡」

（やだっ♡♡ 気持ちいい♡♡ おまんこ舐められてっ♡♡ こんなの知らないっ♡♡♡）

指は中を掻き回し、舌はクリトリスを舐る。上下からの挟撃。ベンチの端を掴み、木目に爪を食い込ませて身を振る。逃げ場はない。暗闇の中、戸川の舌と指だけが世界のすべて。

ちゅるちゅるっ♡♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ちゅぷっ♡♡♡

「はっ♡はっ♡はっ♡ もうだめっ♡♡ 何かくるっ♡♡ お腹の奥からっ♡♡♡ 怖いっ♡♡ 怖いのにっ♡♡ 気持ちいい♡♡♡♡」

「イケよ。暗闇の中で、先輩の舌と指でイケ」

指が奥の一点をぐりん、と挟り上げた。同時にクリトリスを歯で軽く挟まれ——

「——っ♡♡♡♡♡ おおおおおおっ♡♡♡♡♡♡」

絶頂の声が廃駅のアーチ天井に跳ね返り、何層にも重なって降り注ぐ。自分の声が四方八方から反響し、頭の中まで快楽に飲み込まれる。ベンチの上で腰がびくんびくんと跳ね、太腿が戸川の頭を挟み込んだ。

（イっ……た……っ♡♡先輩の指と舌でっ……こんな場所でっ……まんこでイッちやったっ♡♡♡）

「はっ♡♡はおっ♡♡はおっ♡♡はお……っ♡♡」

余韻で痙攣する身体に——

パチン。

懐中電灯が点いた。

「っ——！」

突然の光に目が眩む。暗闇に順応していた瞳孔が灼かれる。そして——見えてしまった。

ベンチの上でジーンズを膝まで下ろされ、カントを晒し、愛液で太腿をてらてらと光らせた自分の姿。

「やだっ……見ないでっ♡♡ライト消してっ♡♡♡」

「さっきは暗くて見えなかったから。——お前のまんこ、ちゃんと見せろよ」

懐中電灯がカントを直接照らす。絶頂直後で充血した割れ目がぷっくりと腫れ、愛液がとろりと糸を引いて垂れている。クリトリスは赤く勃起し、包皮から顔を覗かせていた。

「……すごえな。処女のまんこ。これがお前の隠してたもんか」

「見ないでっ♡♡ やだっ♡♡ 恥ずかしいっ♡♡♡」

両手で股間を隠そうとする。けれど戸川はその手首をまとめて掴み、頭の上に押さえつけた。

「隠すなよ。——きれいなまんこだ」

（きれい、なんて——♡♡）

その一言が、涼の胸の奥に突き刺さった。23年間、醜いと思い続けてきた。男の身体に刻まれた瑕疵だと。なのに——

もう片方の手で、カントの割れ目をくばっ♡と広げられた。

「おっ♡♡♡ ひらかないでえっ♡♡♡ なか見えちゃっ♡♡♡♡」

ピンク色の粘膜が懐中電灯に照らされ、愛液でぬらぬらと光っている。その奥が、きゅっきゅっと収縮しているのまで丸見えだった。

「中がひくひくしてるぞ。いったばかりなのに、もう欲しがってるのか」

「ほ、欲しがってなんかっ……♡♡」